

書 評

山下清海編：エスニック・ワールド 世界と日本のエスニック社会。明石書店，2008年3月，257p.，2,200円(税別)。

本書を最初に手にした時の第一印象を述べれば，個性の強いエスニック社会のオムニバスではないかというものだった。しかし，本書を読み進めるにつれ，すぐにそれは評者の過誤であることがわかった。本書は大きく3章に別れており，各章がさらに細分されている。基礎的な概念の説明から始まり，海外でみられる典型的なエスニック社会の成立経緯と現状について豊富な事例が紹介され，そして最後に，今日の日本でもみられるエスニック社会の考察へと続く。世界と日本のエスニック社会の歴史，現状，課題などがこの1冊で分かるように，実に巧みに構成されている。

第I章「エスニック社会の基礎」は，エスニック集団，エスニシティ，住み分け，エスニックタウン，エスニック・ビジネスなどの基本的概念を解説するとともに，エスニック社会の見方や研究の方法などを理解するのに役立つ内容である。「エスニック集団とエスニシティ」(杉浦直)では，基礎的な用語の定義に続いて，世界のエスニック社会を大きく3つに分け，エスニシティの形成パターンの相違を示している。また，エスニック社会にとっては，宗教や言語などの文化的特性の共通性は必ずしも必要な条件ではなく，特定のエスニック集団に属しているというアイデンティティこそが重要であるという。このような主観的，心理的な現象(エスニック・アイデンティティ)は，本書を通して重要な概念の一つとなっている。「エスニック集団の適応戦略」(矢ヶ崎典隆)では，エスニック集団が，国家や地域などのホスト社会に対して，場所と経済的な隙間を探し出しながら適応する様子が述べられている。「エスニック集団の住み分けとエスニックタウン」(山下清海)では，居住面の住み分けだけでなく，エスニックタウンの歴史的，社会的，文化的，経済的な差異

に応じた地域的な特色，およびその形成要因を考察することの重要性が指摘されている。「エスニック・ビジネス」(片岡博美)では，この種のビジネスのもつ社会・文化的機能や拠点性について検討した上で，エスニック集団とホスト社会の異文化交流の発展可能性が示されている。「エスニック地理学の研究史」(千葉立也)では，エスニシティに関わる地理学研究の動向が概観されている。以前は文化や人口といった個別分野に分類されていたこれらの研究は，グローバルな人の移動の増加に伴い，世界的には1980年代から，日本では1990年代以降に活発化したことが述べられている。関連する研究の増加に伴い，エスニシティのもつ社会的側面(生活面，アイデンティティ，労働等)を，様々な権力の渦巻く都市の社会空間の中でとらえる見方も広がっているという。

第II章「世界のエスニック社会」では，それぞれの事例国をフィールドとする研究者により，各国のエスニック社会の具体的な姿が描き出されている。

「海外の移民社会」のパート，「(1) 海外の日系人社会」(飯田耕二郎)では，詳細なデータに基づき，明治初期の留学生の渡米以降，日系移民が北米，中南米，フィリピン，オセアニア，シベリア等の世界各地へ広がる過程が紹介されている。「(2) 海外の華人社会」(山下清海)では，世界各地に広く分布する華人について，移住の要因，移住後の労働の種類，出入国のゲートウェイとしての港の機能とチャイナタウンとの関係などが考察されている。「(3) 海外のインド人社会」(南埜猛)では，インド系移民の移住先とその要因が考察されている。とくに，近年では中東産油国やアメリカ合衆国への移住が増加していること，とくに，IT技術者の海外移住は急増していることが紹介されている。

続く「南北アメリカ」，「ヨーロッパ」，「アジア・オセアニア」のパートでは，アメリカ合衆国(矢ヶ崎典隆)，カナダ(大石太郎)，ブラジル(仁平尊明)，

イギリス (杉浦直), ドイツ (加賀美雅弘), フランス (手塚章), スペイン (石井久生), オランダ (大島規江), 中国 (杜国慶), シンガポール (山下清海), タイ・ラオス (横山智), オーストラリア (吉田道代) について, 各エスニック社会の特色が論じられている。本章は第I章に比べて各国の紙面が多く割いてあり, 各地でみられるエスニック社会の成立の歴史的経緯, 変質・変容過程, そして近年の変化が詳細に述べられている。

第III章「日本のエスニック社会」は, 日本国内にみられるエスニック社会を事例としたものである。アイヌ社会 (千葉立也), コリアン社会 (福本拓・千葉立也), 華人社会 (山下清海), ブラジル人社会 (片岡博美), インド人社会 (澤宗則) が取りあげられ, 日本における各エスニック集団がどのような契機で出現し, その後どのように変質してきたかについての詳細な考察が展開されている。今日では, 日本国内においてもエスニック社会はもはや珍しい存在ではなくなった。いわゆるニューチャイナタウン (池袋) の出現や, 在日コリアン社会の変質, 定住化の進むブラジル人社会や, 世界都市・東京で増加するインド人IT技術者, 留学生の増加などの事例を知るにつれ, 多くの国々でみられる種々の社会問題は, もはや他国のものではないことに気づく。

本書を通読して気づいた点を挙げるならば, 移民のオリジンと歴史的経緯, そして移動時期などの事項について, 個々別々に述べられている印象は拭えない。個々の充実した記述に加え, 移民のダイナミズムを世界的に関連づけて示す方法もありえたのではないだろうか。例えば, WASPを中心とした移民社会から東欧・南欧系, そしてアジア系移民が増加するプロセスは, アメリカ合衆国のみならずカナダやオーストラリアでも共通してみられるトレンドである。また, 19世紀半ばのゴールドラッシュや各種開拓事業のための移動, 日本人の北米や中南米への移動, 20世紀初頭のイタリア人のブラジルへの移動, 第二次大戦後～1960年代までに世界的にみられた移動も大きなダイナミズムを感じる。世界的な移民の流れについての世界地図 (流線図) を掲載した Segal, A.: An

Atlas of International Migration. Hans Zell Pub, 1993, 233p. のように, 移民発生のメカニズムを個別に述べるだけでなく, グローバルな視点から概説する章があってもよかつたかもしれない。

ないものねだりをしたが, これは本書の価値を損なうものではない。個々の国の記述については, それぞれは少ない紙面ながらも非常に充実した内容となっている点に感服させられる。編者も冒頭に述べているように, 一昔前に比べると, 国内外を問わず, エスニック社会についての調査はやりやすくなってきている。また, 統計が整備されている国については, 極端な話では, 現地に行かなくても GIS で地図を作成する程度の作業は可能となった。一方で, 統計には表れない, 真の姿を見抜く力も調査には不可欠である。本書は, 現地をよく知る研究者による鋭い切り口が随所に現れている。例えば, 外国に居住するインド人の増加とグローバリゼーションとの関連について言及する一方で, そうした一握りの「成功者」の陰で, 現実には多くの国民が貧困にあえいでいる現実も紹介されている。また, ドイツ統合と都市再開発の波にさらされるベルリンのトルコ人の事例では, トルコ人としてのアイデンティティを保持・継承するために集住し続ける様子が端的に描き出されている。移民社会というエスニック集団がもつ本質を鋭く見抜く視点は, 実際に現地に滞在した地理学者ならではの丹念なフィールドワークの賜物である。本書は, 外国のエスニック社会を理解する上で有益であることは言うまでもないが, 着実に増加しつつある日本国内のエスニック社会を理解する上でも, 多くの示唆を与えてくれる。本書は真の国際理解や異文化理解にとって不可欠な一冊である。

(堤 純)

村山祐司・柴崎亮介編:『シリーズ GIS 4 ビジネス・行政のための GIS』朝倉書店, 2008年3月, 196p., 3,800円(税別)。

全5巻で刊行されつつある『シリーズ GIS』は, うち3巻までが GIS の実践・応用の紹介にあて